

(2021年10月15日講演)

## 11. 「米国キャッチシェア・プログラム（ベーリング海）」

日本水産株式会社 代表取締役 社長執行役員 浜田晋吾委員  
(代読 日本水産株式会社 海洋事業推進部 部長 金柱守氏)

本日参加できない当社の浜田に代わって代読させてもらう。

本日は、「米国キャッチシェア・プログラム」と題して、アラスカのベーリング海におけるスケトウダラ漁業のIFQの現状と仕組み、対象魚種と混獲魚（By Catch）の管理方法について説明させてもらいたい。

資料P2、3の政策、法律、管理手法等については、先ほど小松委員長からも説明があり、すでに読んで頂いていると思うので、詳しくは説明しないが、ベーリング海でIFQやキャッチシェア・プログラムを導入した背景として理解してもらえればと思い資料として付けた。資料P3の一番下に、「ベーリング海におけるスケトウダラは2008年～2010年にかけてTACを大きく削減した」とあるが、これは資料P12の参考③にグラフを出しているが、真ん中がへこんでいる。このとき何が起こっていたかということ、科学的に資源状況が危ない、3・4歳魚が対前年の65%しか確認されず激減していることが分かったので、大胆にTACを減らし、それまでは140万トンぐらいの漁獲をしていたものを、80万トンにまで減らして資源回復を図った。こういった資源管理が機能していることが非常に重要なことではないかと思っている。

資料P4からベーリング海スケトウダラ漁業の協同方式の説明をさせてもらう。先ほど小松委員長からも説明があったが、外国からの漁船の移入の禁止、米国スケトウダラ漁業の合理的な操業の振興を目的としたAFA(American Fisheries Act)、「米国漁業振興法」と言うが、これが1998年に制定され、ここが非常に大きな転換期になっている。ここでの重要なポイントとしては、IFQ(米国の場合はITQではなくIFQという呼び方をしている個別譲渡性漁獲枠というもの)を使って協同漁業方式を取り入れた。これがスケトウダラ漁業の成功、今に至るベースになっている。これは協同漁業として、組合、コーポレーティブを組むのだが、これはあるセクターに属している各社、各船がコーポレーティブを結び、そこで漁獲するというのが、この漁業の方式の肝になっている。全体の枠は、米国のベーリング海のスケトウダラ漁業の全体の枠のうち、最初にCDQ(先住民枠)を10%除外する。この先住民枠はほかに売ることが可能な枠になっていて、先住民の地域の活性化のために使われる資金になる。あと混獲枠約4%と書いているが、その約4%を先に除外することで、ほかの漁業、例えばカレイやギンダラといった底魚漁業で混獲するものなどについてはこの4%内で管理してもらう。残りの約86%が、このベーリング海のスケトウダラ漁業の協同方式として使われる。これも後ほど出てくるが、陸上セクター、洋上セクター、

母船セクターと3つのセクターに分かれ、そこで運用されている。

なお、スケトウダラに関する主な規制というのがあり、先ほどのAFAの関係もあるのだが、総量規制として上限は200万トン、外国資本はAFAで閉め出されているので、外国資本については25%までしか入れられない。イニシアチブは絶対に米国が取るということである。漁獲規制としては、資本比率10%以上の漁船の所有漁獲枠による漁獲が企業単位で全スケトウダラ原魚17.5%を超えることは禁止されている。要は資本を入れて原料の囲い込みをさせないということである。更に生産規制として、TACの30%を超えて1つのグループが30%を超えて生産してはいけないということが決められている。

資料P5も基本的には同じことを書いてあるのだが、具体的な表を交えて説明している。2021年に関しては137万5,000トンが枠としてあり、CDQ枠、それから混獲枠がある。スケトウダラの協同方式に与えられたセクター割り当てとしては118万8,000トンあり、このうち洋上枠が40%であるので47万5,000トン、陸上枠として50%の59万4,000トン、母船枠として10%の11万8,000トンと分かれる。一番上の会社は、漁船が5隻あるが、この中でCOOPのような形を作っている。陸上が一番分かりやすいのだが、陸上の場合、陸上工場がA工場からE工場とあるが、ここに小さな漁船が幾つか付いている。当社は12隻の船と契約してCOOPを結んでおり、この12隻の船を使って漁獲をしている状況である。

少し話が外れるのだが、混獲枠約4%（21年度は約3.6%）は、自分たちのスケトウダラの船団以外が混獲でTACを消化してしまうことを防御するために先に渡している。ここに書いてある主にAM80というのが先ほど話したカレイやギンダラといったH&Gの凍漁船が混獲するものに使われているということである。

資料P6は、陸上セクターの協同漁業方式の実態になる。A社～E社グループまであり、ここに洋上枠とCOOP枠のグループができていて、例えば一番上の会社場合、洋上枠として船で獲っているのが10万トン、COOP枠が19万3,000トンあるということになる。陸上工場であるのでこのCOOP枠について説明すると、陸上セクターで契約する小規模漁船がCOOPを形成して決まった陸上工場にデリバリーする。このCOOP形成についてはAFA上ではほぼ義務的で、必ずやらなければいけない。ただ、各漁船がIFQを持っており、これの集合体がCOOPになって、そのグループのCOOP枠となっている。この漁船は、基本的には契約しているCOOPの中にデリバリーするが、A工場のグループから例えばB工場に移りたいという船が出てきた場合、直接移動はできない。1年間オープンアクセスとしてどこにも属さず奪い合いをされてしまうような状況にさらされる。その1年後に他のCOOPに入ることが可能で、なかなか簡単には移れないような状況になっているが、逆に言うと移ることもできるので、その辺は交渉しないとイケない。COOPを形成している上で何が良いかという、その中でIFQの数量を貸し借りできることもあるので、デリバリーや量をコントロールするというか、工場がこの次に持ってきてくれとか、このようにしてくれというのもある程度融通しやすくなっているというメリットがあるし、漁船もそれに応じ

て獲りに行くということで、休みを取るとか、無理して獲りに行かないとか、いろいろなことがシステマ的にできるようになっている。

資料 P7、微小枠、微小魚種の管理方法についてであるが、スケトウダラ以外の複数の混獲魚も、By Catch の全てではないが、各魚種が管理されており、他魚種の枠割当もスケトウダラの割当比率と基本は同等になっている。最も小さい魚種の TAC を各船に分配したことで割当量が微小になってこの漁獲枠が満杯になることでメインの魚種の枠を残したまま操業がストップといった事態を回避する方法が地域の漁業管理委員会で決められている。スケトウダラの場合主にキングサーモンやチャムサーモン（シロザケ）の混獲が多いということで、こちらの管理方法を説明させてもらう。左の表では、2007年にキングサーモンが急激に増えているが、この後いろいろ試行錯誤をしながら今の状況の低い水準で混獲されているという状況である。

資料 P8、キングサーモンの管理方法であるが、各漁船が与えられた制限内（枠割当内）にとどめることが基本としてはあり、その混獲がどうなっているかを記録・報告する責任があり、オブザーバーが必ずそれを確認、保持して報告することになっている。詳しくは資料 P13 の参考④を見てももらえればと思う。このデータは、混獲状況を漁業の参加者に通知する連邦漁業管理者を通じて全部オープンにされている。だから混獲がどのような状況にあるのかが常に分かるようになっていて、情報が常に開示されているという状況で、船団はもし危ないとなれば自発的にその地域を離れて、他の場所で操業を行う「ローリングホットスポット」という対応をしている。要は漁場から逃げるということである。ここで重要なのは、陸上洋上関係なく情報はオープン、相互に回避行動を取る。COOP 内の各漁船の混獲もシェアして対応することで操業を止めないことを皆で徹底してやることが重要なポイントかと思う。ハード的なことも、図を入れているが、サケが逃げやすいような網の状況を作っている。

資料 P9、まとめとして、IFQ を共有する操業の導入がベーリング海の現在の状況には非常に有効になったということである。陸上セクター50、洋上セクター40、母船セクター10に割り当てることで、それらの各セクターの割り当てが明確になっており、各社 COOP を結成して協同で漁を実施できる。COOP 内では漁獲枠、混獲枠とも移譲が可能ということで融通が利く。それから、微小枠においても第三者による科学的な資源管理とセクター・漁法間を超えた徹底的な数値管理、情報公開、海域内での混獲、回避行動や漁具導入等、システムツールも協同で行っている。

提言としては、日本はまだ IQ を大中型まき網の一部魚種に導入したばかりであり、明確な KPI と目標値、スケジュールを定めて、その有効性を検証しなければならない。日本の資源保護の最大の課題である MSY に基づいて設定する TAC が正確に管理されていない。対象魚種の明確な漁獲数量の把握が必要である。IQ 化によって資源管理の強化を図っても、TAC を漁業全体で有効活用するための混獲魚種対応を含む運用の検討が不可欠であると思う。沿岸漁業との連携も重要な課題として TAC が正確に管理できる、これが前提条件にな

るのではと考えている。以上である。